



丸 鬼

— 幼兒の生活(九) —

「丸鬼するもの寄つといで」

逃げたいのか、鬼になりたいのか、どつちでもいゝのでありま

す。溢れ漲る元氣に方向を與へ、法則を設けて、その活動満足

が一倍深められさへすればいゝのであります。幼兒達の心の自

由は、自ら遊戯の法則の中に入ることによつて、聊かも歴さへ

られないのみか、却つて眞に自分達の自由を満喫することが出

来る程に無限に大きいのであります。(倉橋惣三)



棒 登 り

— 幼児の生活(十) —

「上へ〜。もつと〜上へ」

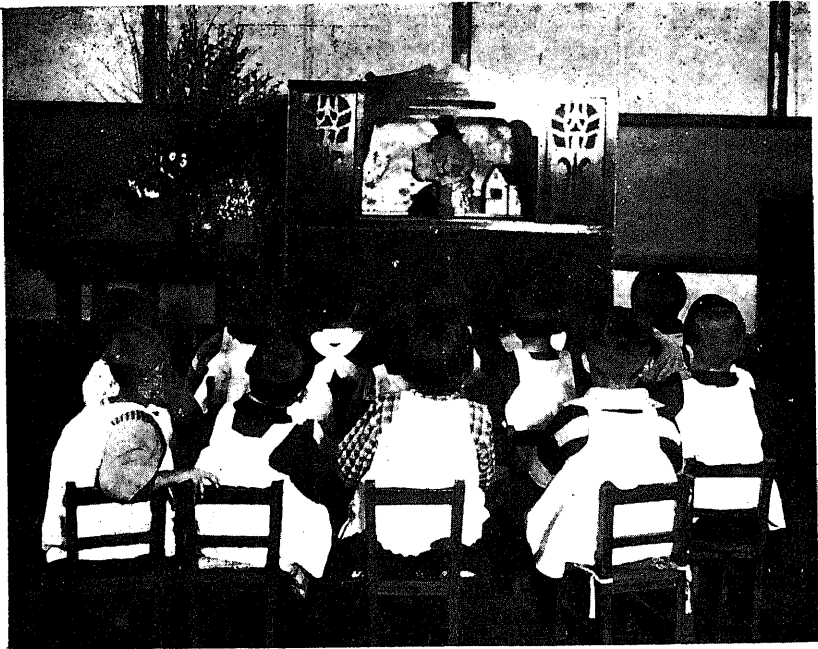
自ら攀ちて高きに登ることの愉快は、今日の都會の子どもに封鎖せられた愉快であります。それを補ふ爲に工夫せられたのが、この新しい遊具「棒登り」(シンゲルシム)であります。

「あぶない」。それは憶病な大人の餘計な懸念に過ぎません。この複雑さうに見える棒の間を攀ちさせて、強い握力と、自在な全身筋肉の屈曲とによつて軽々と登らせてゆくには、理智の用心よりも、ずつと賢明な本能の安全があります。

登り切つて、青い大空に近づくこと四メートル、爽かな高い風が、小さい勇士の丸い頭を吹いて居ります。

「上へ〜。もつと〜上へ」

(倉橋惣三)

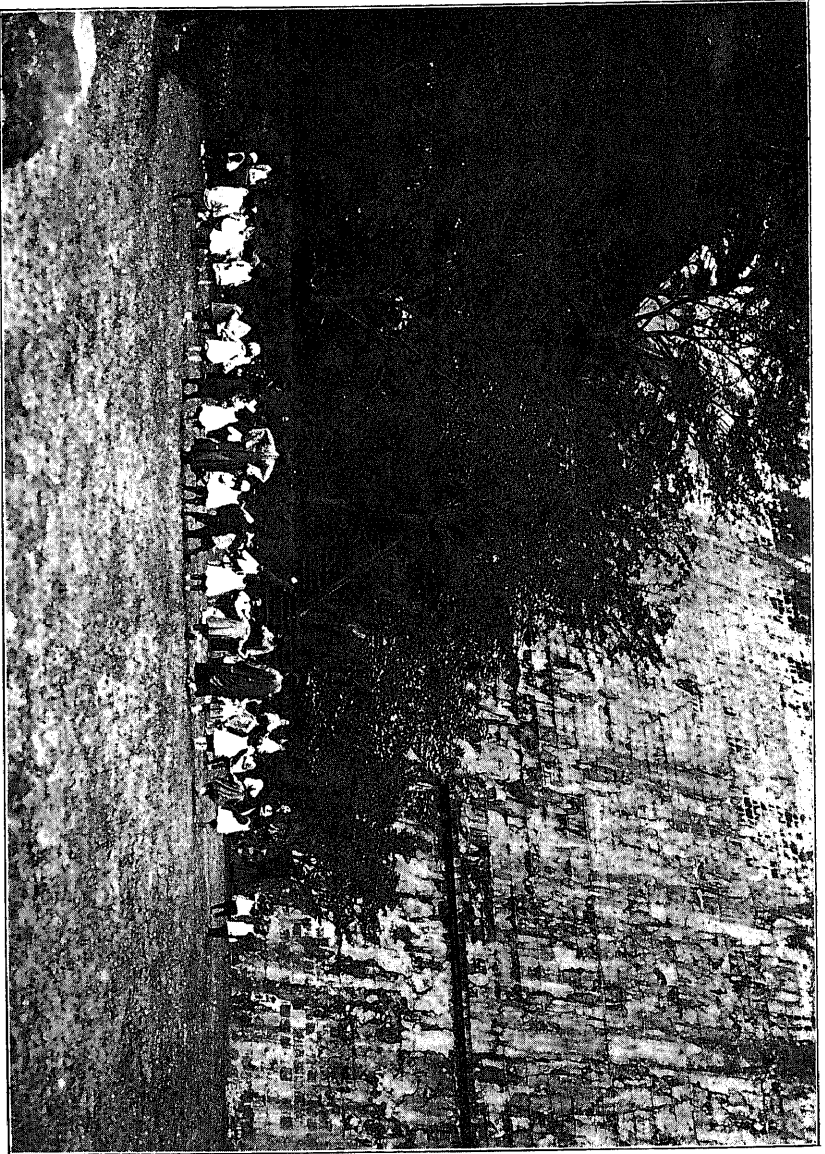


人形芝居

— 幼児の生活 (十一) —

子どもは、おはなしを聞くのでなく、見るのだと謂はれて居ります。まして、そのおはなしを小さい舞臺の上に活動させて見せて貰ふことは、どんなにか面白いことでありませう。不細工な手製人形の不器用な動き方、舞臺の後から聞えて来る先生の餘りお上手でないせりふ。それでも小さい観客達には名優の至藝であります。恍惚として小半時、こんなによく、幼児達の注意をひきつけて置くことは、他のことでは六かしいことでもあります。——今し、舞臺は猿と蟹との對話の最中、その人形よりも一倍活潑に動いてゐるのは、幼児達の感興と想像とであります。室外には静かな雨が音もなく降つてゐます。

(倉橋惣三)



遠 足 長 崎 市 城 山 幼 稚 園